

個人別態度構造分析による日本人学生の海外留学における学び

前田 ひとみ

(外国語学部英米語学科)

Personal Attitude Construct Analysis on Learning in Japanese Students Study Abroad

Hitomi MAEDA

(Department of English Language Studies, Faculty of Foreign Language Studies)

海外留学における学びとは何なのか、多くの資料や研究が存在しその教育的価値を検証しているが本研究では足立（2010）の学部生の海外留学の教育的価値を援用し、 Semester 留学から帰国した本学英米語学科に在籍する学生を対象に個人別態度構造分析により要素の抽出と学びの構造の視覚化を試みた。現地で“英語に浸かり語学力を高める”ということから語学に関する学びが学生にとっては一番大きな位置を占めるのではと推測していたが、結果、抽出された学びの多くは語学力に関するものではなく、異文化適応能力に関するものが最多を占め、被験者による留学の学びの本質が浮かび上がった。本研究は質問紙調査では掴みきれない学生の Semester 留学における学びを個人別態度構造分析により検証した報告である。

キーワード：個人別態度構造分析、海外留学の教育的価値、異文化適応能力の獲得

はじめに

日本人学生にとって海外留学の意義とは、文部科学省によると「日本人の若者が海外留学をし、国際感覚を磨くことは、個人としては、国際体験を通じた国際理解・知識の拡大、語学力の向上など学生の能力や可能性」を広げることに繋がり（文部科学省、2016）、今日、海外留学の教育的価値に関して様々な成果や効果が報告されている。例えば、足立（2010）は学部生の海外留学の教育的価値を①学問・学術的学び、②外国語運用能力の獲得、③異文化適応能力の獲得、④人間的成長の4つの枠組みで論じており（表1）、著者も他の論文で援用した経緯がある（前田、2016a）。他にも海外留学の教育的価値に言及した調査には、Rubin & Sutton（2001）の留学で得られる成果に関するものや木村（2011）の短期研修参加者を対象にしたものなどがある¹。

1. 本研究の目的と調査方法

本研究の目的は Semester 留学から帰国した本学英米語学科に在籍する学生4名を対象に個人別態度構造分析により、1) 海外留学における学びの構造を視覚化し、2) 表1の足立（2010）の学部生の海外留学の教育的価値の視点からどのカテゴリーが学生にとって一番学びとして多く出現するか検証することを目的とする。中でも、英米語学科の留学の果たる目的としては語学力の向上があり、現地で英語漬けの毎日を送ることから語学に関する学びの項目が多く出現すると推測するがそれも踏まえて検証したい。

文献調査によると留学の成果に関する報告では、留学から帰国した学生に対して実施した質問紙調査から得られたデータを分析したものが多くあるが、質問紙調査は全体の傾向を数量的に分析する事には

適していても、各々のデータの裏にある被験者に対する本質的な解釈には至りにくく、また“質問項目”は調査者の枠組みで作成される点やデータの解釈段階に至った時点で調査者の主観が前面に出てくる可能性を完全には排除できない点などが質問紙調査の弱点として指摘できるであろう。そのため本研究は質問紙調査では見過ごしがちなマイクロな学びを質的・量的メリットを併せ持つ個人別態度構造分析により、各々の学生にとっては貴重な学びとなった

ものを視覚化・体系化していく。詳細は追って説明する。

参加者は筆者の授業を含むキャンパス内で募り、研究内容に興味を持った学生4名が参加した。調査開始前に調査内容の詳細を口頭及び紙面で説明し、調査内容の承諾、研究結果の匿名での公表の可能性についての同意を得て調査手順の確認後、承諾書にサインを貰った。

表1 学部生の海外留学の教育的価値

①学問・学術的学び	1-1・自国では得られない、あるいは自国とは視点の異なる専門分野における知識、ないし教養 1-2・留学先の国・地域の社会、文化、歴史などに関する様々な知識 1-3・座学、体験学習（オフキャンパス学習）
②外国語運用能力の獲得	2-1・（特に学部留学の場合）教科書を読む、講義を聞く、ディスカッションに参加する、レポートを書くなどのアカデミックな活動を通して言語を習得する 2-2・（特に語学留学の場合）語学授業のカリキュラムを消化することにより、そのカリキュラムが意図したスキルと知識を習得する 2-3・日常の生活をとおして、生活に密着した語彙や表現を身に着ける。現地に特有の事物（例：商品、食べ物、サービス、システム）や概念・習慣（例：行事、思想）とそれを表す言葉を学ぶ
③異文化適応能力の獲得	3-1・未知・不明瞭なものを受け入れる寛容性、物事を複眼的にとらえること 3-2・新たな価値観・視点・常識を発見 3-3・自己の文化（価値観・常識・視点・習慣など）を再発見し相対化すること
④人間的成長	4-1・能力開発（アカデミックな学びや異文化体験を通して習得する対人能力） 4-2・感情制御（感情表現を適切に行い、コントロールする能力） 4-3・自律を通して達成する自立（精神的な独立、問題解決能力、粘り強さ等） 4-4・成熟した対人関係の確立（他者との違いを受け入れる寛容さ、健全で持続的な対人関係を築ける力） 4-5・アイデンティティの確立（自己の文化、民族的アイデンティティの確立と促進） 4-6・目的の確立（留学をして自分のやりたいことが見つかった、自分の可能性も開けて見える） 4-7・人格・価値観の統合（画一的で厳格な価値判断から他者の信条・信念を認め、尊重できるようになり価値観と行動が一致する）

出典：（足立，2010）を前田（2016a）がまとめ本稿用に加筆

1-1. 個人別態度構造分析（PAC分析）

本論文で研究手法として取り上げる個人別態度構造分析（PAC分析）は著者も以前に異文化観に関する研究（前田，2016b）において使用した経緯があるが、この分析方法は社会心理学と臨床心理学の知見を持つ内藤（1993，2002）によって開発された手法で、PAC分析は当該テーマに関する自由連想、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター分析、調査協力者（被験者）によるクラスター構造のイメージや解釈の報告を経て、個人別に態度やイメージ構造を分析する質的手法であり、またデンドログラムに基づき、調査協力者自身の枠組みで分析するという量的手法も兼ねた研究方法であるといえる（内藤，1993：2002：前田，2016c）。内藤（1993）によると「これまでの数量的分析を用いた研究のほとんどがデータの出力まではきわめて操

作的で科学的であるが、データの解釈段階に至った途端に研究者の主観的な判断に頼るという事実」と述べ（p.45）、「個人別態度構造分析」の研究手法を取り入れた²。末田（2001）は、PAC分析は「量的研究及び質的研究それぞれのメリットを掛け合わせたもの」であり、使用するメリットとして「調査者は調査協力者の枠組みを用いて、調査協力者の体験を理解しようとする」、「調査協力者の報告及びその解釈はデンドログラムに基づいているので、再現性が高い」とその有効性に言及している。デメリットとしては時間がかかる点、調査の倫理への配慮が求められている点、協力者のコミットメントが不可欠な点を挙げている。「協力者のコミットメント」と「倫理的配慮」に関しては、インタビューであれ、アンケート調査であれ、どのような研究方法でも正確なデータを得るうえで欠かせないものであることから

PAC 分析に限ったデメリットでないが、「時間がかかる点」に関しては同感である。PAC 分析による調査や研究は数多く報告されているが（例として、八若, 2007；濱川, 2009；今野・池島, 2007；佐々木, 2012；新館・松崎, 2011；前田, 2016b；前田, 2016c）、PAC 分析は 1 人に対してインタビュー、類似度距離行列によるクラスター分析、及びデンドログラムの作成、そしてその結果を元に再度インタビューを実施することから、非常に時間がかかる研究手法であり、それら研究における調査規模も数名という実験規模が一般的のようである。

次に調査協力者が踏む調査の手順としては、まず①調査協力者には連想刺激文が与えられ、本研究で使用した刺激文は「海外留学で学んだことや得たものを思い浮かんだ順に番号をつけてカードに記入してください」である。次に②連想した順に 1 語ずつ 1 枚のカードに書いてもらい、③そのカードを重要な順位に並べかえてもらった。④次にカードの組み合わせの関連度の近さを 7 段階で評価し、各対がどの程度類似しているかについて全ての対に対し「1: 非常に近い」から「7: 非常に遠い」までの 7 段階で評価してもらった。調査者は④の情報（類似度距離行列）をコンピューターに入力し、Ward 法に基づくクラスター分析を行いデンドログラムを作成した。使用した統計ソフトは MATLAB© である。次に⑤デンドログラムに基づいたインタビューを実施し、⑥各連想項目のイメージがプラス (+)、マイナス (-)、どちらともいえない (0) のいずれに該当するか答えてもらった。

2. 分析結果と解釈

まずそれぞれの調査協力者（被験者）の属性を示し、次にクラスター分析の結果と調査協力者自身による解釈を示す。最後に筆者の総合的解釈を行う。

2-1. 学生 A の結果

学生 A の個人属性は次の通りである。①性別：女、②学年：大学 2 年生、③学びの形態：カナダで 4 か月間のセメスター留学

学生 A のクラスター分析の結果は図 1 に示した。学生 A は自由連想で 12 項目を挙げ、左側の数字は

想起された順位を表し、カッコ内は重要度順位を示している。また各項目に対するイメージを +、-、0 で表している。学生 A にとって海外留学の学びで一番重要な項目は「コミュニケーション能力が上がった」である。

このデンドログラムは大きく 3 つのクラスターに分けられ、クラスター 1 が「物事を真剣に取り組むようになった」、[目標を持つようになった]、[積極的に]、[視野が広がった]、[人生に対してモチベーションが上がった] で、クラスター 2 が「リスニング力が上がった」、[英語の言い回しが上手になった] で、クラスター 3 が「オープンになることの大切さを学んだ」、[自分の意思をはっきり伝えることの大切さを学んだ]、[コミュニケーション能力が上がった]、[相手との共通点を探して距離を縮めることの大切さを学んだ]、[人脈が広がった] である。

次に学生 A 自身の解釈により各クラスターを命名してもらった。結果、クラスター 1 は〈CL1: 世界観が変わった〉としてまとめることができるという。この中の「物事を真剣に取り組むようになった」というのは、「日本語は勝手に頭に入ってきて理解できるが英語はきちんと聞かないと理解できず、そのため日本にいる時よりも向こうでは物事を真剣に見る姿勢が身に付いた」と答え、[目標を持つようになった] は、「現地で会った語学留学生や学生たちは目標や夢を持って留学をしていた」ことから目標を持って人生を過ごす大切さに気付いたと述べ、日本にいた頃よりも物事をより真剣に、目標を持って取り組むようになったという。また「積極的に」いうのは、「日本人同士では固まる傾向があるが、そこで固まっていると意味がなく、自分からどんどん何事にも取り組んでいかなくてはいけないことを学んだ」ことや、[視野が広がった] いうのは「自分のやりたいことを仕事にしている人が多く、30 歳になった時にこれやりたいと思ってもできる社会があり、日本は社会の許容度が狭く、融通がきかない」と現地での周囲の人々の人生観や価値観、また社会の在り方に触れ、学生 A 自身の視野が広がった様子について話してくれた。そして「人生に対してモチベーションが上がった」というのは「いくつになっても自分がやりたいことがあれ

ば、それができる。自分の人生の中で海外に出ることも可能だと、人生に対してもモチベーションが上がった」と述べ、留学で多くの人と接することで学生 A 自身のそれまで日本で培ってきた世界観は変化し、多くの気づきや感じたものがあったと語ってくれた。それは学生 A 自身の人生におけるモチベーションの向上にもつながり、留学が果たした大きな役割にあらためて学生本人もそして著者も気づかされることになった。

クラスター2は学生 A によると〈CL2：英語力の向上〉でまとめることができ、[リスニング力が上がった] というのは、「英語漬けだった生活のため、日本にいる時は頭で日本語に変換していたけれどカナダでは英語から英語にそのまま理解するようになり」、自身の英語力向上には大きな進歩だったと語ってくれた。また、「分からない単語も調べたりしなくても自分の持っている知識とボキャブラリーでその文章を説明するようになった」([英語の言い回しが上手になった]) と英語に対する柔軟性や発想力、そして伝えようとする力と気持ちが身に付いたことに触れた。クラスター3は、〈CL3：コ

ミュニケーション能力の向上〉でまとめることができ、「日本人は基本的に自分の事はあまり話さないけれど、カナダでは自分の事を多く伝え、どんどん仲を深めていこうとしている。日本は少しずつ」と日本とカナダでのコミュニケーション方法の違いや人との距離感の違いに触れ、また「自分の意思を言葉にしないと伝わらない、フィーリングとか汲み取ってもらえない」と日本の中では当たり前とされているコミュニケーション方法では現地だと通用しなかったと述べた。これは日本の“察する文化”に関連しており、いわゆる“1を聞いて10理解する”ことが当たり前でないというコミュニケーションスタイルであり、“伝えたいことは察してもらうのではなく、きちんと言葉で伝える”ことの重要性を意味し、学生 A の異文化・自文化理解に繋がっている。また、「英語は100%ではないので、フレンドリーにうまく会話できないから、少しでも共通点を見つけてそこから会話を広げ、距離を縮めることの大切さがわかった」と語り、異文化適応能力を徐々に身につけているプロセスが明らかとなった。

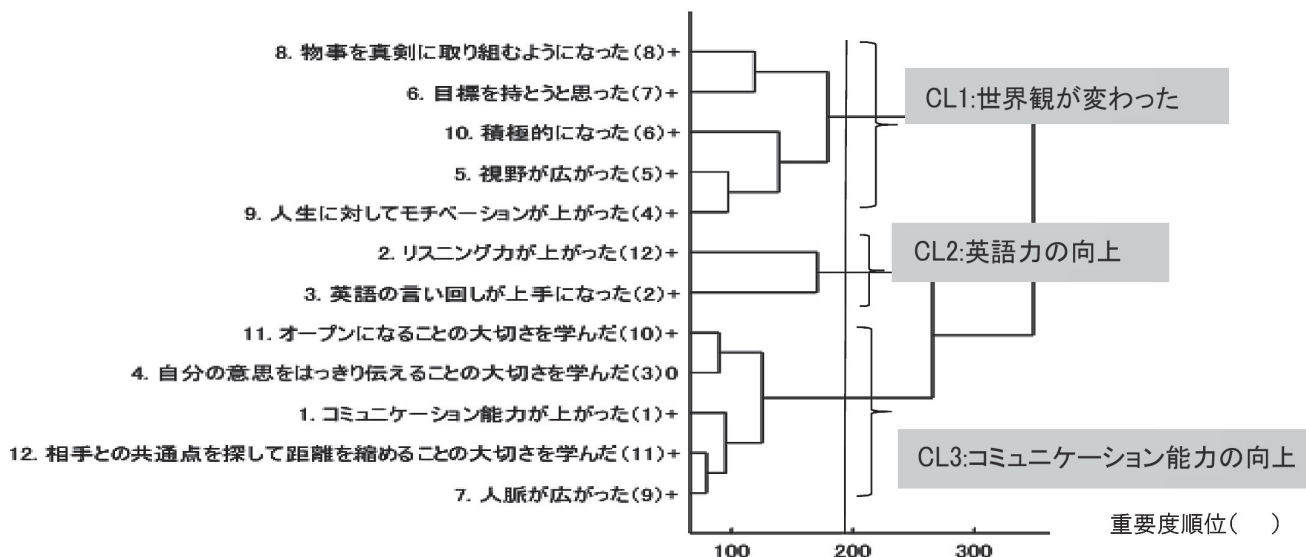


図1 学生 A のデンドログラム

2-2. 学生 B の結果

学生 B の個人属性は次の通りである。①性別：男、②学年：大学2年生、③学びの形態：カナダで4か月間の Semester 留学

学生 B のクラスター分析の結果は図2に示した。

学生 B は自由連想で6項目を挙げ、学生 B にとって海外留学の学びで一番重要な項目は「積極性がついた」である。このデンドログラムは大きく2つに分けられ、クラスター1が「異国の人と授業を受けて異文化を学んだ」、[カナダの習慣や文化に対する

興味]、[環境適応能力] で、クラスター 2 が [自己主張ができるようになった]、[コミュニケーション能力の向上]、[積極性がついた] である。

学生 B 自身の解釈により各クラスターを命名してもらった。結果、クラスター 1 は〈CL1：異文化への関心・知識・興味が深まった〉で、「カナダの文化を授業で学び、中国やサウジアラビアのクラスメートが発言する中で、彼らの暮らしぶりや食文化、家族のことなどについて学んだ」と答え、同じ空間で、同じ立場で授業を受ける中で、垣間見える彼ら留学生の“時間”に対する価値観の違いや積極性について気づくことが多くあったと述べた。[カナダの習慣や文化に対する興味]、[環境適応能力] というのは、「カナダは雨が多いが、現地の人はフードで雨をよけ、傘をあまり使用しない習慣」に驚き、また日常の過ごし方も休日は家族でリビングで映画を見たり、トランプをしたりと自室に戻らず食後一緒に過ごしたり、感謝祭やクリスマスなどイベントを家族や親戚でお祝いすることに驚いたと語ってくれた。日本では成長に伴い親とは過ごしたがらず友人や恋人との時間が優先される傾向があるが、ホスト家族の“家族としての時間の過ごし方”にカルチャーショックを受けたとのことだった。また日本には存在しない“サマータイム”に驚き、1 時間得る感覚に不思議な気持ちになり、また時間が突如変わったことで、「翌日の授業の開始時間は本当に大丈夫なのか、みんな時間が変更したことを分かって

てるのか」と心配でたまらなかったと語ってくれた。

クラスター 2 は〈CL2：海外に必要なスキル〉でまとめることができ、[自己主張ができるようになった]、[コミュニケーション能力の向上]、[積極性がついた] の 3 項目がクラスター化されている。学生 B は「自分から意見を言っていないと“変な人”だと思われ、日本だと言わなくてもなんとなくわかるし、意見を言うのと逆にならずうざいとか、わがままとか自分勝手だと思われる」と日本とは違う価値観に対する驚きを語ってくれた。学生 B は授業中に自分の意見を発言することやディスカッションに積極的に参加するようなことは今までの人生になかったが、カナダでは自分の意見を積極的に述べるようになり、その態度こそが“問題意識をしっかりと持っている”ということの証であり、先生やクラスメートに対する表現だと異文化での新たな学びを語ってくれた。また [コミュニケーション能力の向上] という項目に対し学生 B は、学校ではなるべく日本人は避け、留学生と友人になろうと努力したり、自分から挨拶したり話しかけたり、そういう行動を日本にいた頃にはとったことがなく、英語を話すために積極的にホストファザーと映画について話したり、留学生と話したりしたことについて語ってくれた。そして一番嬉しかったのが、現地で道に迷った時に歩行者に英語で質問し、聞き取れたことが一番印象に残っていると語ってくれた。そしてその小さな積み重ねが自信につながっていったという。

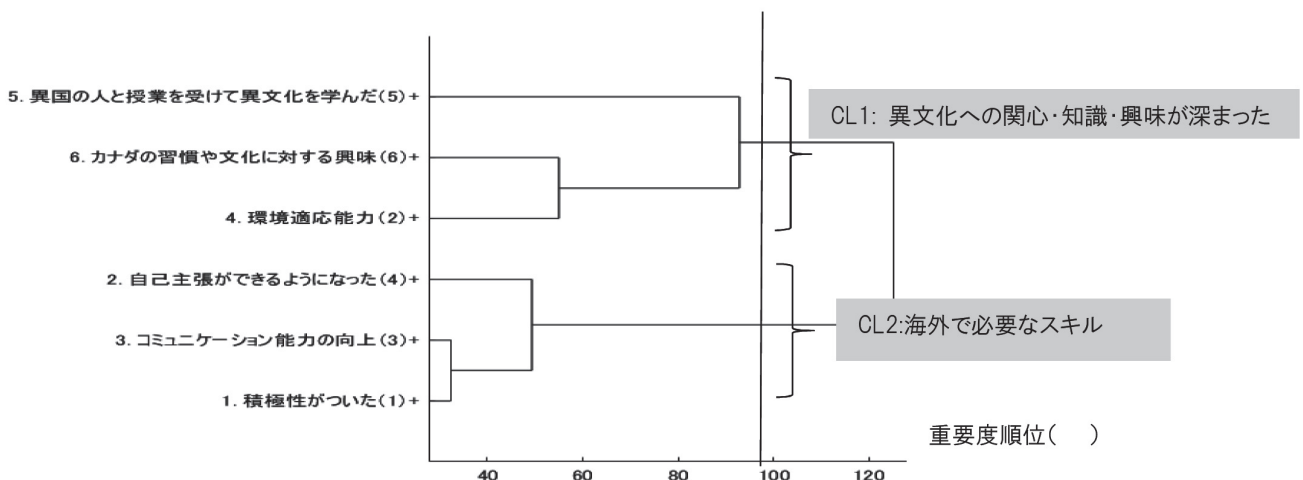


図 2 学生 B のデンドログラム

2-3. 学生Cの結果

学生Cの個人属性は次の通りである。①性別：男、②学年：大学2年生、③学び形態：カナダで4か月のセメスター留学

学生Cのクラスター分析の結果は図3に示した。学生Cは自由連想で7項目を挙げ、学生Cにとって海外留学における学びで一番重要な項目は「スピーキング」である。

このデンドログラムは大きく3つに分けられ、クラスター1が「なんでも参加」、「受け身は良くない」で、クラスター2が「リーディング」、「ライティング」、クラスター3が「リスニング」、「受け入れる」、「スピーキング」である。

学生C自身の解釈により各クラスターを命名してもらった。結果、クラスター1は「CL1：積極性」としてまとめることができ、「なんでも参加」は滞在期間中、様々な交流会やイベントがあり、日本にいるときよりも積極的に参加し学ぼうとしたと語り、海外からの留学生はそういう参加をする姿勢が高く、自分も積極的に参加したと語り、「受け身は良くない」というのは「積極的であるべきで、しゃべらないというのは通じない。アイコンタクトや遠まわしの表現で日本人は察してくれるけど、そういうのは現地ではないので、自分が受け身だと会話から取り残され疎外感が生まれることに繋がる」と話し、海外で生活することにより日本人のコミュニケーションとの違いに触れ、異文化・自文化理解に繋がっている様子がうかがえる。また「いや

～”という日本式のあいまいなNOの言い方は現地では通じず、ちゃんとNOという意思表示をしないと誤解を招く」と話した。クラスター2は「CL2：英語力の向上」としてまとめることができ、「リーディング」と「ライティング」の向上をあげた。これは異文化において、英語で学ぶということは日常の過ごし方と切っても切れない関係であり、学生Cにとっては留学における学びのなかでは語学に関する学びは上位にくるものであった。各授業1日100分が3コマあり、課題を通して英語力がついてきたことについて言及した。

次にクラスター3は、「CL3：柔軟性」でまとめることができ、「リスニング」、「受け入れる」、「スピーキング」がこの中に含まれるという。カナダでの生活は日本に住んでいる時以上に宗教を身近に感じる事が多く、ホームステイ先でのお祈りやイスラム教のクラスメートのお祈りの時間、自国が記念日だから現地での学校も休む等、宗教色の濃い生活環境の中で柔軟にものごとを受け入れることができるようになったという。生活の中に宗教が存在し、宗教は価値観に影響し、他者への理解と宗教への理解は切り離せない関係にあり、その点から学生Cの異文化における学びがカテゴリー化されたことは非常に納得のいくことであった。家族の時間の過ごし方、食生活に関する会話をホストやクラスメートとすることにより、「スピーキング」、「リスニング」、「受け入れる」という項目と共に留学中の学びにつながっていったと語ってくれた。

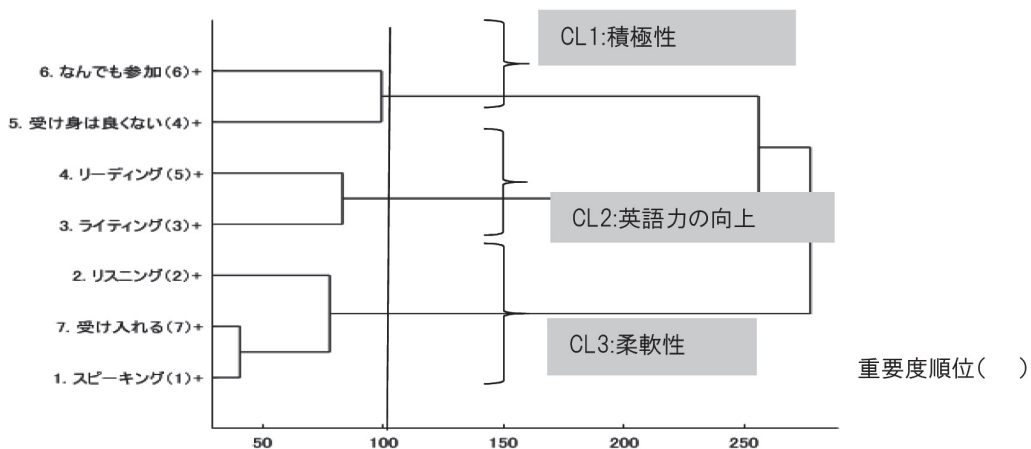


図3 学生Cのデンドログラム

2-4. 学生Dの結果

学生Dの個人属性は次の通りである。①性別：女、②学年：大学2年生、③学びの形態：マレーシアで4か月間のセメスター留学

学生Dのクラスター分析の結果は図4に示した。学生Dは自由連想で11項目を挙げ、左側の数字は想起された順位を示し、学生Dにとって留学における学びの中で一番重要な項目は「文化の違い」である。

このデンドログラムは2つに分けられ、クラスター1が「黒人に対する周りの考え方」、[アラビア人は周りからどう思われているか]、[日本人は信頼されている]、[日本人は時間に厳しい]で、クラスター2が「マレーシアと日本の歴史」、[アジアは素晴らしい]、[文化の違い]、[すごい楽しかった]、[言葉が通じる楽しさ]、[イスラム教は怖くない]、[宗教に対する考え方]である。

学生D自身の解釈により各クラスターを命名してもらった結果、クラスター1は〈CL1：現地の人々の外国人に対する見方〉としてまとめることができ、現地の人々の持つ「黒人は怖い」、「黒人はDanger(危険)だから遊ぶのをやめたほうがいいよ」と言われたことや現地の人々の持つアラビア人に対

する偏見についても語ってくれた。[日本人は信頼されている]というのは「現地でフェスティバルが開催され、その踊りやスピーチ等の出し物は日本人学生にまかせておけば安心という認識が彼らの中にはあり、日本人は時間を守るし、きちんと仕事するし、期待通りやってくれるし、“日本人というブランド”が現地の人々には非常に歓迎されやすい」と語ってくれた。学生Dは「現地で“Where are you from?”(どこから来たの?)と聞かれる度に“日本人です!”と答えるのが待ちきれないほど、自分のナショナリティを誇らしく思った」と語り、マレーシア人の日本に対するポジティブなイメージに接し、海外から日本を眺めることで、日本人としての誇りを“初めて”実感したという。

クラスター2は〈CL2：歴史・文化・宗教に対する新たな発見と認識〉でまとめることができ、「日本がマレーシアを植民地にしていたことやマレーシアがイギリスの植民地だった歴史についても知らず、中高で習ったのかもしれないけれど、何も理解していなかった」と、現地で日本の歴史や文化、政治に関して質問されても何も答えられずショックを受けたエピソードを語ってくれた。

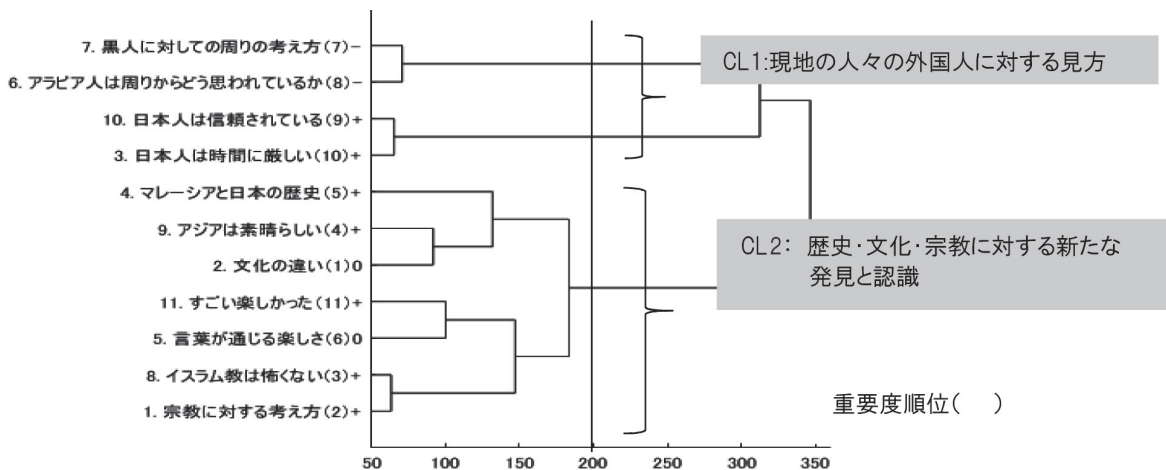


図4 学生Dのデンドログラム

3. 総合的解釈

学生 A は自由連想で 12 項目を挙げ、クラスター分析により 3 つのクラスター (CL 1 : 世界観が変わった、CL 2 : 英語力の向上、CL 3 : コミュニケーション能力の向上) が出現し、それらは表 1 の④人間的成長、②外国語運用能力の獲得、③異文化適応能力の獲得に位置した (表 2)。

表 2 学生 A のセメスター留学における学び

連想項目	表 1	クラスター
8. 物事を真剣に取り組むようになった	4-3	CL 1 : 世界観が変わった (④人間的成長)
6. 目標を持つようになった	4-6	
10. 積極的になった	4-3	
5. 視野が広がった	4-6	
9. 人生に対してモチベーションが上がった	4-6	CL 2 : 英語力の向上 (②外国語運用能力の獲得)
2. リスニング力が上がった	2	
3. 英語の言い回しが上手になった	2	
11. オープンになることの大切さを学んだ	3-1	
4. 自分の意思をはっきり伝えることの大切さを学んだ	3-3	CL 3 : コミュニケーション能力の向上 (③異文化適応能力の獲得 & ④人間的成長)
1. コミュニケーション能力が上がった	3-1, 4-1	
12. 相手との共通点を探して距離を縮めることの大切さを学んだ	3-3	
7. 人脈が広がった	3-1, 4-1	

次に学生 B は自由連想で 6 項目を挙げ、クラスター分析により 2 つのクラスター (CL 1 : 異文化への関心・知識・興味が深まった、CL 2 : 海外で必要なスキル) が出現し、それらは表 1 の③異文化適応能力の獲得、①学問・学術的学び④人間的成長に当てはまった (表 3)。

表 3 学生 B のセメスター留学における学び

連想項目	表 1	クラスター
5. 異国の人と授業を受けて異文化を学んだ	3-2	CL 1 : 異文化への関心・知識・興味が深まった (③異文化適応能力の獲得, ①学問・学術的学び)
6. カナダの習慣や文化に対する興味	1-2, 3-1	
4. 環境適応能力	3-1	CL 2 : 海外で必要なスキル (④人間的成長)
2. 自己主張ができるようになった	4-3	
3. コミュニケーション能力の向上	4-4	
1. 積極性があった	4-3	

次に学生 C は自由連想で 7 項目を挙げ、クラスター分析により 3 つのクラスター (CL 1 : 積極性、CL 2 : 英語力の向上、CL 3 : 柔軟性) が出現した。それらは表 1 の④人間的成長や②外国語運用能力の獲得、③異文化適応能力の獲得に適合した (表 4)。

表 4 学生 C のセメスター留学における学び

連想項目	表 1	クラスター
6. なんでも参加	4-6	CL 1 : 積極性 (④人間的成長)
5. 受け身は良くない	4-3	
4. リーディング	2	CL 2 : 英語力の向上 (②外国語運用能力の獲得)
3. ライティング	2	
2. リスニング	2, 3-2	CL 3 : 柔軟性 (②外国語運用能力の獲得 & ③異文化適応能力の獲得)
7. 受け入れる	3-1	
1. スピーキング	2, 3-2	

さいごに学生 D は自由連想で 11 項目を挙げ、2 つのクラスター (CL 1 : 現地の人々の外国人に対する見方、CL 2 : 歴史・文化・宗教に対する新たな発見と認識) が出現し、表 1 の③異文化適応能力の獲得や①学問・学術的学びに位置するものだった (表 5)。[5. 言葉が通じる楽しさ] (表 5) は、語学に関する項目とも理解できるが、インタビュー内で学生 D は「英語やマレー語でボディランゲージや目に見えないものを含めてコミュニケーションがとれる楽しさ」と説明していることから言語そのものの獲得を意味するものではなく、表 1 の 3-2 異文化適応能力の獲得項目の「新たな価値観・視点・常識を発見」に分類した。

表 5 学生 D のセメスター留学における学び

連想項目	表 1	クラスター
7. 黒人に対する周りの考え方	3-1	CL 1 : 現地の人々の外国人に対する見方 (③異文化適応能力の獲得)
6. アラビア人は周りからどう思われているか	3-2	
10. 日本人は信頼されている	3-3	
3. 日本人は時間に厳しい	3-3	CL 2 : 歴史・文化・宗教に対する新たな発見と認識 (①学問・学術的学び & ③異文化適応能力の獲得)
4. マレーシアと日本の歴史	1-2	
9. アジアは素晴らしい	1-2	
2. 文化の違い	1-2	
11. すごい楽しかった	3-2	
5. 言葉が通じる楽しさ	3-2	
8. イスラム教は怖くない	3-1	
1. 宗教に対する考え方	3-2	

4名の調査協力者は現地の語学学校において1日中英語で授業を受け、ホームステイ先や寮生活で英語に浸かって生活することで、英語力に関する学びがクラスター分析により出現すると予測していたが、学生から共通して出てくるものは語学に関する学びはそう多くはなく、「異文化適応能力の獲得」に関する項目(19項目)、「人間的成長」(12項目)、「外国語運用能力の獲得」(6項目)、「学問・学術的学び」(4項目)、であった³。また2名の学生(学生Bと学生D)からは、語学に関する連想項目が出現せず、インタビューの中でも特に言及されることはなかった。このことから、留学の目的や達成できることとして、一般的に英語力の向上に注目しがちだが、実は一個人の留学全体の経験を科学的な方法で分析してみると、学生は異文化適応能力の獲得や異文化・自文化理解を深めることを自身の学びとして強く実感し、それら学びの項目が表出しやすい可能性を残す結果となった。

さいごに

本研究はセメスター留学から帰国した英米語学科に在籍する学生4名を対象に個人別態度構造分析により、1)海外留学における学びの構造の視覚化を目指し、2)足立(2010)の学部生の海外留学の教育的価値の視点から学生にとっての学びを検証した。現地での英語漬けの毎日ということから語学に関する学びが最多を占めるのではと推測していたが、結果、抽出された学びの最多は異文化適応能力に関する項目であり、調査協力者(被験者)に共通する海外留学における学びとして、①自文化への理解と気づき、②他文化への理解(宗教・異文化に暮らす人々に対する理解等)を挙げる学生が多くを占めた。また海外における生活の中で、自身の「人間的成長」に関連した項目も多く表面化した。しかし語学に関する学びは多くは表出せず、その理由として、海外で生活している以上、コミュニケーションのベースとして英語(語学)は常にそこにあり、「道具として特別視せず存在していた可能性」があり、留学での学びとしてわざわざ表出しなかった可能性もある。もしくは語学に関する学び以上に、その他の学びが濃く、表出した優先順位に影響を及

ぼしている可能性もあるが、語学力に関する学びが最多を占めなかったという事実は調査者としては大変興味深いものであった。本研究は4名という規模で行った実験だが同様の傾向があるのか規模を拡大し、今後の研究につなげたい。

注

- 1 詳細は(前田, 2016a)を参照。
- 2 PAC分析の妥当性と有効性を検証した研究は数多くあるが、PAC分析による統計処理の留意点についても参照願いたい(小澤 & 丸山, 2009; 小澤 & 坪根 & 嶽肩, 2011)。
- 3 項目がまたがる場合は両方にカウントした。

《参考文献》

- 足立恭則(2010) 大学学部課程における海外留学の教育的価値とカリキュラムにおける位置づけ『東京英和女学院大学人文・社会科学論集』, 第28号, pp.77-91.
- 八若壽美子(2007) 「学部・大学院留学生の日本語学習における自己評価の変容—PAC分析による事例的研究」, 『言語文化と日本語教育』, 33号, pp.117-120.
- 濱川祐紀代(2009) 「大学院留学生の漢字学習に関する意識調査—PAC分析による事例研究」, 『JSL漢字学習研究会誌』1号, 国際交流基金日本語国際センター
- 木村啓子(2011) 「短期海外研修プログラムの効果と役割」 <http://www.jasso.go.jp/about/documents/keikokimura.pdf> (2014/11/10)
- 今野博信・池島徳大(2007) 「個人別態度構造(PAC)分析によるピア・サポート活動の効果測定の検討—大学生に夜中学生へのピア・サポート活動を対象にして」, 『ピア・サポート研究』, Vo.4, pp.19-26.
- 前田ひとみ(2016a) 「セメスター留学の教育的価値」 『目白大学人文学研究』, 第27号, pp.277-290.
- 前田ひとみ(2016b) 「個人別態度構造分析による異文化観に関する心象の一考察:海外留学予定学生の場合」 『目白大学高等教育研究』, 第22号, pp.1-10.

- 前田ひとみ (2016c) 「国際理解教育における新たな参加型分析プロセスと成果検証方法の提案」, 『国際理解教育』, Vol.22, pp.3-12.
- 内藤哲雄 (1993) 「個人別態度構造の分析について」 『人文科学論集』, 27, pp.43-69.
- 内藤哲雄 (2002) 『PAC分析実施法入門「改訂版」: 個を科学する新技法への招待』 ナカニシヤ出版
- 小澤伊久美・丸山千歌 (2009) 「PAC分析における好ましい統計処理とは: ソフトウェアによってデンドログラムが相違する問題への対処のために」, 『ICU日本語教育研究』 6, ICU日本語教育研究センター, 2009, pp.27-47.
- 小澤伊久美、坪根由香里、嶽肩志江 (2011) 「PAC分析法における統計処理の留意点—よりよい実施とデータ解釈のために」 WEB版『日本語教育実践研究フォーラム報告』 pp.1-10.
- 佐々木良造 (2012) 「PAC分析を用いた日本語ボランティアの態度と態度の変化に関する研究」 第九回国際日本語教育・日本研究シンポジウム要旨
- 新館啓一・松崎学 (2011) 「教師の自己分析へのPAC分析の適用可能性に関する研究-筆者自身の新任期の自己成長を振り返ることを通して」, 『山形大学教職・教育実践研究』, 6, pp.27-37.
- 文部科学省 (2016) 「5. 日本人の海外留学」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/attach/1249709.htm (2016/6/2)
- Rubin, D. & Sutton, (2001) Assessing student learning outcomes from study abroad. *International Educator* 10 (2), pp.30-31.
- (受付日:2016年10月14日、受理日2016年12月2日)